

## 2024年3月期 決算説明会 質疑応答の要旨

この質疑応答集は、2024年5月23日に開催した決算説明会にてご出席の皆様からいただいたご質問を記録したものです。理解促進のために一部内容の加筆修正を行っております。

### Q1. 外部協業の強化について、戦略・施策を教えてください。

A1. まずは、BtoB領域(医療材用途、工業品用途)において、お客様や産官学を含めた連携を今まで以上に強化していきたいと考えています。もうひとつは、イノベーションセンターを中心として、弊社が持つ技術をお客様にオープンにして更なる協業に繋げていきたいと考えています。大学や学会等と共同で事業や製品開発に取り組んでおりますので、皆さまにお伝え出来ることが生じましたら速やかに発表いたします。

### Q2. 研究開発と新規事業への資金配分について教えてください。

A2. 2024年3月期の研究開発費は12.0億円でした。本年度からの新中期経営計画では、更に研究開発費を増加させてイノベーション創出を加速させてゆきたいと考えています。また、BtoBでのモノづくりで得た知見をBtoCへ展開することも積極的に行いたいと思っております。資金配分の具体的な数字は検証中ですが、トータルな企業活動の向上という観点で継続的な取り組みを行う考えです。

### Q3. 2025年3月期の業績予想のうち、営業利益の増益の内訳について教えてください。

A3. 2025年3月期の営業利益は対前期3億円程度の増益を予想しています。テープ事業製品の価格改定やヘルスケアフィールド・海外フィールドの成長が主な増益の要因です。一方で、主要原材料への為替の影響、人的資本投資による人件費の増大、価格改定後のテープ事業主要製品の数量減を減益の要因として捉えています。主要原材料への為替の影響は、2億円～3億円と見立っています。人件費に関しても前期と同様の3億円程度は増加することを予想しています。

**Q4. 2025年3月期のロヒつぼ膏とケアリーヴの伸びについて見通しを教えてください。**

A4. ロヒつぼ膏は、インバウンドの回復が見られ、ほぼ新型コロナウイルス感染症流行前の水準に戻っていますので、8%程度の伸長を見込んでいます。ケアリーヴは、グローバル展開を含めて様々な拡販施策を打ち出していく中で5%程度の伸長を見込んでいます。

**Q5. 新中期経営計画(3年間)で営業利益を45億円まで伸ばすドライバーは何でしょうか。**

A5. テープ事業の収益性改善、ロヒつぼ膏やケアリーヴを中心としたヘルスケア製品、EC販売の伸び、グローバル事業の拡大が主要因と考えていますが、特にテープ事業の収益性改善が中心になります。現段階で進めている価格改定だけでなく、昨年、一昨年と新しい生産体制の構築を進めてきた埼玉工場、安城工場の生産体制の改善がテープ事業の収益性向上に寄与しました。今後は、この投資に見合う新製品の拡大が必須であり、特にテープ事業の新しい製品開発にぜひ注力していきたいと考えています。

メディカル事業についても、引続き新中期経営計画の3年間でヘルスケアフィールドの拡大による収益性への貢献を図っていきたいと考えています。

先ほどもご説明いたしましたが、BtoBでのモノづくりで得た知見をBtoCへも展開することをベースとしています。例えば医療材フィールドでは、今まで病院で医療従事者が使用していた傷あとケア製品がご家庭で使われるようになった事例がございます。また、高齢者の方を含めた在宅介護の市場へ今後益々注力して参りたいと思っています。

**Q6. 中国拠点について、リスクをどのように捉えているでしょうか。また中国以外では、インド市場に対する検討状況はいかがでしょうか。**

A6. 中国拠点については、いろいろなリスクがあることも承知しておりますが、まずは駐在員事務所を置いて現地でのリスク分析およびマーケティング活動を行い、中国市場の分析と今後の展開の可能性を判断していきたいと考えています。また、インドについても非常に魅力ある市場であり、現在もニチバンタイランドからアプローチをしております。グローバル事業拡大に向けて、様々な可能性を検討して参りたいと思います。

Q7. イノベーション創出について、もう少し詳しい説明をお願いします。

A7. 2030年度に向けて、イノベーション創出が大きな課題になると捉えています。従来から新製品をプロダクトイノベーションということで捉えていましたが、それに加え昨年度からは、新技術や新生産方法の創出をプロセスイノベーションと捉え、両方に取り組んでいく姿勢を全社に浸透させていくために、現場のイノベーション活動を推進しています。

プロダクトイノベーションについては、イノベーションセンターや製品設計部を中心に、新たな市場・新たなお客様の要望を取り入れながらスピーディーに新製品を開発する、いわゆるアジャイル型の開発を進めています。外部との協業にも今まで以上に積極的に取り組んで参ります。

以上